明治学院雑記

播本秀史

1．150年史編集委員会

明治学院は2013年に創立150周年を迎えます。120周年記念を祝ったのは1997年でした。それは東京一致神学校を起点としたものでした。150周年はヘボン塾の創立1863年を起点とするものです。神学校を起点とした学校史と英学塾を起点としたそれでは記述も変化するかもしれません。どのような学校史になるか、どうぞご期待ください。

編集委員会にはキリスト教研究所の所員、研究員が委員として加わっています。編集委員長は社会学部の遠藤興一教授、副委員長は私です。当初、経済学部の大西晴樹教授が副委員長でしたが、学長になられたので交代になりました。大西学長は顧問として参加されます。久世　了学院長も顧問でいらっしゃいます。久世学院長は前回の『明治学院百年史』において「学徒出陣と明治学院」を担当され、会津若松出身の学徒兵「長谷川信」を取り上げておられます。学校史として異彩を放つものでした。教養教育センターの渡辺祐子准教授も委員に名を連ねられています。以上が所員（名誉所員）です。客員研究員の村上文昭先生（前関東学院大学教授）、協力研究員の中島耕二先生（本学非常勤講師）、丸山義王氏、辻　直人氏（北陸学院大学）も入っておられ、毎回、活発な議論を重ねています。研究所の提供科目である「近代日本と明治学院１」（通称「明治学院学」）の講師の一人である原　豊氏も編集委員でありかつ実質事務局長として活躍されています。

2．「近代日本と明治学院１」

1858年、日米修好通商条約が締結されました。その「第8条」によってプロテスタント宣教師6名が日本にやってきました。第8条は居留地内でのアメリカ人の信教の自由を保障する内容でした。それを受けてアメリカ人の信教を支援するために、またキリスト教を日本人に伝道するために長崎と神奈川（横浜）にやってきたのです。改革派のブラウン、フルベッキ、シモンズ、長老派のヘボン、聖公会のウイリアムズ、リギンズの6名です。そのうちリギンズはまもなく帰国し、シモンズも宣教師をやめるので、残るは4名です。ヘボンはクララ夫人とならんでヘボン塾の創立者でバラ学校、築地大学校、東京一致英和学校へと連なります。S.R.ブラウンは1873年ブラウン塾を創設し東京一致神学校へと流れます。大きくいえばこの二つの学校が合流して明治学院となります。フルベッキは明治学院で教鞭をとります

が明治政府にも多大の影響を与えた人です。この3名が明学関係者となります。残る1名のC.M.ウイリアムズは長崎に上陸し、大隈重信らを教えます。後、築地にパウロ塾を創設します。現在の立教学院の前身です。

明治学院は日本を代表するプロテスタント大学であり学院です。キリスト教はキリシタン禁制の江戸時代はもちろん、明治になっても天皇制国家から幾多の困難を強いられました。「文部省訓令 12 号」などもその一例ですね。しかし、今日までキリスト教およびキリスト教学校は続いて、日本の歴史にも重要な役割をはたしています。かつて太宰治は「聖書一巻によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はつきりと二分されている」(「HUMAN LOST」『新潮』391) と述べましたが、文学以外の分野でもそうである可能性は高いのではないでしょうか。「近代日本と明治学院1」の講義などを通して解明しませんか。近代日本に及ぼした明治学院やキリスト教の意味を共に考えてまいりましょう。

(はりもと　ひでし　所員・文学部教授)